

項目の統計を国ごとに収める。これは、けっこう便利であり、とくに東南アジアの諸国の国別比較を試みると、なかなか教えられるところがある。

第2部は戦後の動向に重点をおいた国ごとの歴史をとりあつかう。東南アジア諸国については、つぎの論文があげられている。いずれも専門家の手になる簡潔なものだ。

東南アジア——Saul Rose

ビルマ——H. Tinker

タイ——D. Insor

カンボジア、ラオス、ベトナム——P. J. Honey

マレーシア——Derrick Sington

インドネシア——Leslie Palmier

フィリピン——Walter Frank Choinski

第3部に最も重点がそそがれている。宗教・芸術・文芸・政治・少数民族と紛争地域・アジアと世界・社会問題・知識階級・マスメディア・経済問題について、それぞれ数編の論文が収録されている。これら諸論文は、どちらかといえば、中国・インド・日本を中心にアジアをとりあつかっており、東南アジア諸国のウェイトが小さい。東南アジア関係として必読の論文は、ここには見あたらない。

第4部は付録として、戦後の主要な条約・協定の収載にあてられ、東南アジアの項には、インドシナにかんするジュネーブ会議宣言（1954年7月21日）、マレーシア協定（1963年7月9日）、中国・インドネシア友好条約（1961年4月1日）、コロンボ・プラン、技術協力会議憲章（1950年9月）、ANZUS 保障条約（1951年9月1日）、SEATO 条約（1954年9月8日）が収められている。

アジア問題にかんするハンドブックとしての価値が十分にあると思われるが、東南アジア問題のそれとしては、ものたりないようだ。（本岡 武）

Harry J. Benda, James K. Irikura and Koichi Kishi, *Japanese Military Administration in Indonesia: Selected Documents*. Translation Series No. 6 ; New Haven : Southeast Asia Studies, Yale University, 1965. xxvi + 306p.

本書はかつて早稲田大学大隈記念社会科学研究所編『インドネシアにおける日本軍政の研究』東京：紀伊国屋書店、昭和34年刊に、関係資料として採録された文献に若干資料を加え、全83件とし、これを（1）東南アジア軍政に関する中央政府の基本政策文書、（2）16軍、治（オサム）部隊のジャワにおける一般体制、（3）25軍、富（トミ）部隊のスマトラ（マラヤ）における統治政策、（4）海軍地区の統治政策、（5）インドネシア独立問題の処理、その5門に分類して英訳刊行したものである。翻訳にあたって訳者は、日本陸海軍の特異な文体に苦しんだようであるが、その理解を容易にし、かつ誤りないようにするため、邦文編著者の一人である西島重忠、岸幸一両氏ともしばしば共同討議して周到な準備をおこなった。英訳した標題はいちいちローマ字で転写し、術語は巻末に17ページにわたる語彙を附して漢字、ローマ字、英訳を併記して収め、日本語になじまない読者の理解に便ならしめている。

軍政下インドネシアに関する論著は、オランダを初め若干の国々で、学術的なものからジャーナリスティックな、あるいはヒステリックなきわものに至るまでいろいろなタイプのものが今までに出版されている。しかし本書は、日本語に習熟しない人々に、軍政下インドネシアの根本史料を提供するものとして、少なくとも後世に残る基礎的な労作として特筆大書すべきものであろう。望むらくは、訳者も言及しているように、いわゆる海軍地区（ボルネオ、スマトラ、小スンダ列島、モルッカス諸島、ニューギニア等）やスマトラ地方の軍政資料が、近い将来さらに附加されて、このような有用な研究の集大成されることである。

（中村 孝志）

S. Q. Fatimi. *Islâm comes to Malaysia*. Singapore : Malaysian Sociological Research Institute, 1963. 100p.

マレーシアの歴史自体がまだ十分に研究されていない現在、マレーシアのイスラム教についての研究も当然まだ調査の段階にあり、確実な結論はない。また、これについてのまとまった書物も本書以外にない。

著者はまず、「何故こうした研究が進まなかったのか」について論じ、その原因を追求し、次にマレーシアのイスラムについての研究概要と現状、現段階を明

らかにしている。そして、「マレーシアのイスラム教がどこから、いつ、どうして来たのか」という基本的問題をテーマに、ジャワやマラヤの伝承説話、アラビア・インド・中国史料はじめ種々の史料を用い、Samudra 王 Malik aş-Şālih や ジャワ東部 Loran で発見された Fâtimah の墓碑銘、1902年発見された Trengganu stone の碑文など写真で紹介し、読解、注釈して考察し、すでに発表された多くの論文を詳細に再検討して結論を得ている。

すなわち、イスラム以前から南海交易に従事していたアラブ人、ペルシャ人交易者は、878年頃からマレーシア沿岸にムスリムの町を建て定住したが、彼らと共に来たイスラム教はまだマレー人には受入れられなかった。実際にイスラム教がマレーシアに定着するのは13世紀で、特に13世紀後半以降、スーフィ (Sûfi) の宣教範囲にマレーシアが入ってから Bengal を拠点にムスリム交易者 (アラブ人、ペルシャ人、インド人) やスーフィ布教者の大規模な改宗運動が行なわれてイスラム教が普及していったのであるとし、「どこから、いつ、どうして来たのか」という問いに、「Bengal から13世紀に、ムスリム交易者やスーフィ布教者によって」なる答を出している。そしてこの後、1414年、マラッカ国王がイスラムに改宗してから急速にイスラム教は普及し、一般化していった。1511年にマラッカ王国が崩壊してイスラム教普及の勢いも衰えるが、19世紀に入ってから民族主義的意識に支えられ、勢力回復への試みがなされこれが成功してきたという。

この結論は格別新しくもなく問題もない。ただ本書でマレーシアの概念が一定せず、時としてはジャワ、スマトラを含めてマレーシアとしている点注意すべきである。史料の選択にももう少し配慮が必要と思えるが、著者が用いた豊富な資料とその巧みな配置により、各章がひとつずつ問題を解いてゆくような面白さがあり、興味深く読ませるようになっている。マレーシアにおける、あるいは東南アジアにおけるイスラム教の研究入門書として、また研究資料として十分利用出来る書である。(梅田 輝世)

Teiichi Kobayashi. *Geology and Palaeontology of Southeast Asia*. Vol. I. Tokyo : The University of Tokyo Press, 1964. 289p.

本書は東京大学名誉教授小林貞一博士の執筆になるもので、東南アジアの地質および古生物にかんする学術書である。

第1章の Geology of Thailand では、タイ国の地形・研究史・古生代の層序・中生代および新生代の地質系統・地史について詳述し参考文献をも列挙している。

第2章の Palaeontology of Thailand では、1916年から1962年の間において発表されたタイ国にかんする古生物学的研究のすべてを網羅し、Cambrian から Quaternary までの地層中から発見記載された化石の全部を紹介し、参考文献をも残らず示している。

第3章は Contribution to the Geology and Palaeontology of Southeast Asia で、内容は17節からなり、1963年から1964年にかけて、タイ国・マラヤおよびベトナムの地質および古生物について、著者をはじめとしその主宰する12名の学者の研究内容を包含しているもので、これらの諸国の最近の研究を総括し紹介している。

要するに、本書は、従来の幾多の研究および最近における著者ならびにその主宰する研究グループの研究結果に基づいて、東南アジアにおける regional geology および palaeontology にかんする最古から現代にいたるまでの知識を与え、また、関連分野の参考文献のすべてを示したもので、この方面の研究者にとっては必読を要する著書である。(瀧本 清)

Withesakarani. *Yuk Thorarat*. Bangkok : Samnakphim Prachakhom. 1960, 744p.

本書は、全3冊よりなるタイ国現代政治史シリーズの第1冊目に相当する。本書の題は「暴君の時代」と訳せよう。このあとに Yuk Tamin (「暗黒の時代」) と Yuk Phadthanakan (「国家開発の時代」) の2冊が続く。

タイの中間層知識人の1932年革命以後の政治史にたいする関心にはなみなみならぬものとみえて、現代政治史に関する出版は後を断たない。それらの本にはつまらないものもあるが、参考になるものも少なくない。本シリーズは、構想の規模において、また、